

【日本の大学】第1回——東北大学：研究第一主義を掲げる

東北大学は、今から110年余り前の1907（明治40）年6月に、首都東京から北へ300キロメートル、東北地方の中心都市で「杜の都」と称せられる仙台に東北帝国大学として設立された。



東北大学（写真：東北大学オフィシャルFB）

設立当時、東北地方は「白河以北一山百文」と言われるほどの後進地域であったが、東北地方の旧盛岡藩出身で平民宰相と言われた原敬らが、設立を強く働きかけて実現にこぎ着けた。創立に当たっては、世界に雄飛し、学問を治めてきた若き俊英が教授として集まったことで、研究者たちが独創的な研究成果を続々と生み出した。これを学生に対する教育に生かしたことも相まって「研究第一主義」という建学の精神が確立されたとされる。

理念として「研究第一主義」のほか、「門戸開放」「実学尊重」を掲げた。当初は、数学科、物理学科、科学科の3科からなる理科大学（のち理学部）として開設されたが、その後、医科大学（のち医学部）、工学部、法文学部が加わったことで総合大学としての形態を名実ともに整えていった。同時に、理化学研究所（のちに鉄鋼研究所から金属材料研究所）、電気通信研究所、抗酸菌研究所、高速力学研究所、科学計測研究所などの各種研究所が設置され

た。門戸開放を示すものとして、1913（大正2）年には、日本の大学として初めて3名の女子の入学を許可したことが挙げられる。

第2次世界大戦後の1947年には、農学部を設置するとともに、名称も東北大学に改称し、学制改革によって、文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、工学部、農学部に改組された。その後も、歯学部、薬学部、生命科学研究科、環境科学研究科、会計大学院など、時代のニーズに合わせる形で、次々に新しい学部や学科を設置してきている。

現在は、五つのキャンパス、10学部、19大学院、6研究所を抱え、教職員は6千人余、学生数は学部学生、大学院生などを合わせて18000人弱となっている。このうちアジアを中心に1700人の留学生が学んでいる。



青葉山新キャンパス（写真：東北大学オフィシャルFB）

以下、同大学のホームページに沿った形で大学を紹介していく。

教育目標・教育理念として掲げているのは「指導的人材の養成」である。豊かな教養と人間性を持ち、人間・社会や自然の事象に対して「科学する心」を持って知的探求を行うような行動力のある人材、国際的視野に立ち多様な分野で専門性を発揮して指導的・中核的役割を果たす人材を養成するとしている。また、大学院での教育については、世界水準の研究を

理解し、これに創造的知見を加えて新たな展開を遂行できる創造力豊かな研究者及び高度な専門的知識を持つ高度専門職業人を養成することを目標としている。

創立当初から現在まで貫かれている「研究第一主義」については、こう指摘している。真理の探究を目指す基礎科学を推進するとともに、研究センター大学として人類と社会の発展に貢献するため、研究科と研究所などが一体となって、人間・社会、自然に関する広範な分野について研究する。同時に、「実学尊重」の精神を活かした新たな知識・技術・価値の創造に努め、常に世界最高水準の研究成果を創出し、広く国内外に発信していく。



片平キャンパス（写真：東北大学オフィシャルFB）

こうした使命を実現するための基本方針として、大学は、

- ・人類社会の様々な課題に挑戦し、人類社会の発展に貢献する「世界リーディング・ユニバーシティ」であることを目指す。
- ・世界と地域に開かれた大学として、自由と人権を尊重し、社会と文化の繁栄に貢献するため、「門戸開放」の理念に基づいて、国内外から、国籍、人種、性別、宗教などを問わず、豊かな資質を持つ学生と教育研究上の優れた能力や実績を持つ教員を迎え入れる。それとともに、産業界はもとより、広く社会と地域との連携研究、研究成果の社会への還元や有益な提言などの社会貢献を積極的に行う。
- ・市民への開放講座、インターネットによる教育を積極的に推進するとともに、市民が学術

文化に触れつつ憩える環境に配慮したキャンパスづくりを行う
—————などとしている。

東北大学の「研究第一」「門戸開放」「実学重視」などの理念を体現している代表的な存在として、「金属材料研究所」を挙げることができよう。

金属研は、同大学で最初にできた臨時理化学研究所（1915年設立）が淵源。当初は本多光太郎博士の鉄鋼の研究から始まったが、その後、金属全般から非金属まで含めた物質・材料科学全般にまで研究領域を広げてきた。

現在は、30 研究部門、1 客員研究部門、1 プロジェクト、5 付属研究施設を持つ組織となった。付属する研究者は大学院理学研究科・工学研究科の教育にも従事している。その割合は半々となっており、同研究所が材料科学の基礎から応用までをカバーし、基礎的な原理を知ることでも応用にも活用できるという「実学重視」の理念を裏付けていると言えよう。

金属研は世界的にも最先端の研究所であるとの評価を得ている。また 1987 年に同研は東北大学の付属研究所であると同時に、全国共同利用研究所になり、全国から研究者や技術者を受け入れ、共同研究を積極的に推薦している。近年では、その門戸は、国内のみならず、海外にも開かれ、国際的な研究交流が実施されている。



仙台・青葉祭り（写真：東北大学オフィシャル FB）

英国の教育誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション」は 3 月、日本の大学ランキングを公表したが、その中で東北大学が前年の 3 位から順位を上げて初めて 1 位となった。そ

れによると、同大学は、評価指標のうち主に研究助成金額、学術成果、国際スタッフ、国際プログラムの評価が高まったという。

2002年に、ソフトレーザによる質量分析技術の開発によってノーベル化学賞を受賞した田中耕一博士（島津製作所シニアフェロー）は東北大学工学部の出身である。

また、世界が戦っている新型ウィルス感染症に関しては、東北大学教授で感染症の専門家である押谷仁氏が、政府の感染症対策専門家会議の中心的なメンバーとして、日本の感染症対策をリードしている。

東北と言えば、2011年3月11日に発生した東日本大震災を忘れてはなるまい。東北地方の有力紙、河北新報によると、この大震災で、同大学は、学生2人、入学予定者1人が津波で死亡、宮城県・女川町の農学研究科附属施設など16棟が津波で全半壊したほか、12棟の建物が傾いたりひびが入ったりするなど危険度判定で「危険」と判定されるなど計28棟が被害に遭った。建物被害が約440億円に上り、実験機器約7千台も損壊して被害総額は計770億円に及んだという。大学はその後も、全学を挙げて教育・研究機能の回復と被災地の復旧に努め、その経験と知見を活かして、東北の復興、日本の新生に向けて取り組みを進めている。

< 滝川 進 >